

目次

あとがき	58	随筆 I	一般社会と「寿」	山本裕次郎	51	詩	乱れ心	福山増吉	37	短歌 I	泥睡の街	有田実	13	俳句 I	酒に憑かれた青蛙	高木克憲	1
		II	寿放談	宮本勇一	51	I	ないないづくし	福山増吉	37	II	なぜにさまよう寿の街	尾野一実	15	II	炎暑の杭	高木克憲	2
		III	港湾労働者の心情	佐藤勘治	53	II	寿かぞえ唄	田代幸吉	40	III	わがしごと	山本三郎	24	III	老の春	高野一治	3
		IV	ねえ君たち	町かどのおばさん	54	III	野辺のバラによせて	轟京介	41	IV	燃える剣	照井孤峯	29	IV	流れ星	高野一治	4
		V	散歩の効用	尾野敬一	54	IV	防寒着	伊奈一介	41	V	孤独	安藤繁夫	31	V	医者がよい	高野一治	5
		VI	花吹雪の吉と仁義と酒	小林敬雄	56	V	救急車の来た町で	尾崎孤峯	43	VI	花火の夜	助川信三	24	VI	寄せ場	高野一治	6
		VII				VI	のろわれるべきは人間だ	柏崎一介	43	VII	われら血流す	安藤繁夫	32	VII	くらしがね	高野一治	7
		VIII				VII	祭りの夜に	照井孤峯	44	VIII	友ふたり	安藤繁夫	32	VIII	ふるさとの友	高野一治	8
		IX				VIII	たびに出よう	高橋末治	47	IX	天下の春	安藤繁夫	32	IX	寄せ場	高野一治	9
		X				IX		高橋末治	49	X	われは行く	安藤繁夫	33	X	友ふたり	高野一治	10
		XI				X		高橋末治	49	XI	酒に憑かれた青蛙	安藤繁夫	33	XI	天下の春	高野一治	11
		XII				XI		高橋末治	49	XII	われは行く	安藤繁夫	33	XII	われは行く	高野一治	12

でも絶対にヤクザなんかになるんぢやあねえよ、おっかさんが可愛想だからな」と言いながら、昭和の七、八年頃の五十銭銀貨（ギザギザが廻りにあったきれいな金だつた）をくれたものです。今の金にしたら五千円ぐらいの価値は充分あると思いますが、私はこのきつぷのよい伯父のようにヤクザやテキヤになろうとは一辺も思ったことはなく、いつ死ぬか生きるかの身体を張った渡世に生きる伯父に、正直言って恐怖を抱いていたものでした。伯父は酒に強く、いわゆる一本調子で、いっぺんに一升ぐらいの酒は、一気に呑みほす酒豪でした。しかし、酒ぐせは悪くなく、酒を呑むとほがらかで陽気になり、必ず黒田節をうなりだし、忠治のいたわりの浅太郎のまねをしたものです。

一生涯、身体を張って生きつづけた伯父、花吹雪の吉が、若し今生きていれば、必ず私にこう言うと思います。「ユキ、てめえだらしがねえぞ、男だったらどっつかつかずの中途半端人生のようなことはしねえで靴みがきでけつこう、日本一の靴みがき野郎になつてみろ」と。

伯父の命日にさいし、テキヤ稼業に徹した男の中の男と自分を信じていた今は亡き伯父に、この拙文を贈りたいと思います。

あとがき

「寿文学研究会」は、一九七五年（昭和50年）9月18日に第一回を開いてから、ほぼ毎週一度のペースで、一日も休まず続いている。

中心になったメンバーは、いれかわりがあるけれど、現在、内容的な変質をとげながら、「寿夜間学校」の中の一部門として再スタートをはじめたところである。

日雇労働者の街である「寿地区」には、まるで「文化」や「表現」がないかのように思われているけれど、寿の内部分から、自分たちの言葉と表現をとりもどしたいという思いが、この「寿文学」の発火点である。

まだまだ、独自の表現も言葉もつかみきれてはいないけれど、特に「短歌」や「詩」の中には、独自の境地が開かれつつあるように思われる。

この第一集を突破口にして、つづいて、第二集（「私の生活記録」）を出す準備をすすめている。寿の中には、まだまだかくれた筆力をもった人や、自己表現の思いや切の方々がいると思う。これを機会に、「寿文学研究会」への積極的な参加を期待したいと思う。

寿文学研究会で発行してきた雑誌の目次一覧を次に掲げてみよう。

「寿夜間学校」のおしらせ

寿夜間学校を開いています。どなたでもご自由にご参加ください。

昭和53年第一期（1/5～3/30）

学習テーマは

- (1) 簿記入門講座（講師・大川弘一氏）
- (2) 寿歴史講座（戦後篇）

（昭和20年～53年までの通史を新聞記事を素材にして学習します。）

なお、「寿文学研究会」は、毎月、第4木曜日に行なっています。（作品をご持参の上、ご参加下さい）（2/23、3/23です）

会場・寿町総合センター3階

図書室内 会議室

時間 午後6時～8時

毎週木曜日に行なっています。

「寿文芸」創刊号（1975・12・25発行）

詩「待つ」	星	寛治
短歌「ねむる」	有田	実
寿哀歌	尾野	頭一
雑詠	高木	憲二
続・公園だより	扇	太郎
でんわ一覧表		

「寿文学」2号（1976・4・9発行）

寅さん・ギター・酒	助川	定繁
なぜにさまざま寿の街	尾野	頭一
乱れ心	福山	増美
風来坊	桜井	克也
立ち飲み異聞	田代	幸次
暗闇の底で呻吟する者のための鎮魂歌	轟木	侃
連載（血液銀行と底辺労働者）	伊藤	昭
労働基準法（抜）		

「寿文学」3号（1976・4・30発行）

寿人生その（一）	小林	敬雄
詩・母	田村	武
短歌	川戸	英雄
詩・自然の神	照井	信夫
日雇労働者の唄	稲垣	広吉
故・鈴木常男さんに想う	田代	幸次

連載(□)血液銀行と底辺労働者……………伊藤 昭
 短歌(△)……………桜井 信夫
 // (□)……………有田 実
 或る人生(△)……………田代 幸次
 文学作品研究(△)女工哀史……………田代 幸次

「寿文学」4号(1976・5・21発行)
 一般社会と寿……………山本裕次郎
 寿放談(教育、憲法)……………宮館 勇一
 寿での人形劇公演を終えて……………伊藤 章生
 或る人生(□)……………田代 幸次
 山谷の七不思議……………田代 幸次

「寿文学」5号(1976・6・18発行)
 寿人生その(□)……………小林 敬雄
 ないないづくし……………稲垣 広吉
 うた(三つ)……………鳥居 勝次
 短歌(三首)……………小林 敬雄
 短歌・絵……………尾野 頭一
 風のおいたち(△)……………深沢 健一
 或る人生(□)……………田代 幸次
 短歌(とらわれの身)……………有田 実
 「寿文学」6号(1976・7・2発行)
 風のおいたち(□)……………深沢 健一

稲垣広吉のページ……………稲垣 広吉
 或る人生(△)……………田代 幸次
 文学作品研究(□)ルンペン学入門……………田代 幸次
 研究会報告「酒をめぐって」……………田代 幸次

「寿文学」7号(1976・7・23発行)
 罪だらけの男……………福山 増美
 ああ故郷……………稲垣 広吉
 短歌数題……………尾野 頭一
 息子たちよ……………照井 信夫
 港湾労働者の心情……………佐藤 勘治
 わがテーマ……………轟木 侃
 幻想……………尾野 頭一
 風のおいたち(□)……………深沢 健一

「寿文学」8号(1976・8・26発行)
 寿文学研究会のおしらせ……………尾野 頭一
 夕焼けの記憶……………尾野 頭一
 栄養のバランスとアンバランスの現実……………平野 進
 ねえ、君達……………町かどのおばさん
 短歌二首……………桜井 克也
 寿かぞえ唄……………田代 幸次
 随想・ことぶき……………琴 正夫
 私は新幹線こだま号を停めた(上)……………尾野 頭一
 不条理について(1)……………菊池 譲

「寿文学」9号(1976・10)
 我が半生の記録(二、三話)……………尾野 頭一
 寿文学研究会へのおさそい……………尾野 頭一

「寿文学」10号(1977・3・10発行)
 短歌・俳句・川柳特集……………尾野 頭一

別冊「尾野頭一作品集」
 (1977・9・12発行)

以上ざっと「寿文学」の目次を並べてみたのだが、まだまだ寿地区内における「自己表現」の道はとざされておられ、思いきった叫びや、つぶやきが、ほとぼしり出てこなければいけないと思う。

尚、この作品集の中で既に亡くなられた二人の仲間から冥福を祈りたい。

一人は、田中豊さんである。豊さんは、まだ「寿文学」が生まれる以前、ノートに文学の練習をしていたのだが、その中に、掲載した二篇があった。

もう一人は、国松武好さんである。1977年3月3日、桃の節句に亡くなった。

これから、「寿文研」でがんばるんだと言っていた矢先の死であった。

また、桜井克也さん、福山増美さんは入院中である。一日も早く、元気になって退院されることを祈っている。

「寿文学研究会」連絡先。

横浜市中区寿町4-13-1
 寿福祉センター内 尾野頭一
 (TEL 045・641・0280)
 横浜市中区港町1-1 横浜市役所
 横浜市寿対策室内 加藤彰彦
 (TEL 045・671・2425)

「ことぶき文庫」第二集・予告 私の生活記録

目次	
I ぼくのこと……………	助川定繁
II 私の自叙伝……………	広瀬義一
III わが半生の記録……………	尾野頭一
IV 風のおいたち……………	深沢健一
V 出張と言う名の「飯場」……………	田代幸次
VI 暗にも光あり……………	金 鐘国
VII ドヤのある街で……………	白木 震
VIII 寿反省録(1)……………	小林敬雄
(他)	

「ことぶき文庫」第一集

「漂海民の唄」

(定価 五〇〇円)

発行日 昭和五十三年二月十五日

発行所 寿文学研究会

印刷所 橋本膳写堂